

讀「釋南」——白川文字學の原點に還る（五）——

高 島 敏 夫

はじめに

今回は「南」の字源を論證した白川靜「釋南」を讀む。南は言うまでもなく方位を示す文字である。方位は特定の具體的な物の形で表わしえない抽象概念であるから、それを表意文字で示すことはできない。何らかの間接的手段を用いて表示する工夫が必要である。ところが、甲骨文は象形による表意文字がほとんどであり、文字と文字とを組み合わせて新しい文字を作る會意や形聲という造字段階にはまだ入っていない。いわば生まれたての象形による表意文字を中心とした文字體系である。では象形による表意という方法で表わしえない言葉はどのような手段を用いて表示するのか、という問題にここで直面する。中國語は言語形態の觀點からは孤立語に分類される。孤立語というのは、日本語（膠著語）や歐米語（屈折語）のような語の活用がなく、主に語順によって文法的機能が果たされる言語のことである。言い換えれば語尾の多様な變化を示すための、表音に特化した假名やアルファベットのような文字をさほど必要としないのである。世界の文

字を眺め渡した場合、表意文字から出發した文字でも、表意文字で表わせない言葉には表音という手段を用いざるをえなくなっていく。そこで象形字を略體化した表音専用の文字が考案されるという道をたどることになる。しかしこれはみな孤立語以外の場合である。甲骨文的場合、象形による表意文字でもってほとんどカバーできる文字體系であるから、残された少數の言葉を表現するためには、表音という手段を部分的に適用すればよいのである。いわば例外的な適用である。しかし表音機能に特化した特別な文字を考案しないまま表音という手段を用いるわけであるから、別の文字を借用するという方法を探る。借字とか假借と呼ばれる方法である。甲骨文の場合、王室およびその周邊に關わることを占うという儀禮の記録であるから、かなり多彩な内容を持つとはいえ、そこに用いられる語彙もある程度限られている。また儀禮を示す文字の頻度も高い。したがって表音という手段を用いなければ表わせない言葉はかなり限られてくる。その例外の一つとして方位關係の語彙があるのである。東・西・北なども借字による表語である。しかし今回白川博士が他の方位語とは別に「南」という語（文

字)に限って考證を展開されるのは、別の必要性からである。それは「南」という文字が別の用法を持っているからである。

後に具體的に言及することになるが、甲骨文に用いられる「南」という文字は方位を示す場合だけではない。祖先を祭る際に他の動物とともに犠牲にも用いられることがある。また、南方の國あるいは文化的地域を指している場合もある。こうした多様な意味をもつ「南」であるがゆえに、字源論が成功しにくい要因になっていたのである。

「南」という語の字源を多角的に考察することが求められるゆえんである。

「釋南」は初め『甲骨學』第三號に掲載され、後に『甲骨金文學論叢』(油印本)に再録された。再録された理由を明言されないが、私の推測では、「甲骨學」に掲載されるにあたって、文字學に縁のない人が清書を擔當されたのであろうか、文字の誤記が驚くほど多い。これが再録の本當の理由ではないかと思われる。後に『甲骨金文學論叢』に収録される際に、第一章「殷と南方文化」が削られた。いづれ近々平凡社『白川靜著作集』別巻『甲骨金文學論叢』(下)に収録されるはずだが、今の時点では未刊のため、もっぱら油印本『甲骨金文學論叢』のテキストを用いる。削られた第一章は殷と南方との關係を當時の考古學方面の知見に基づいて描かれた章である。情報として今も有効であろうと思われる点についてだけ略述しておきたいと思う。

「殷と南方文化」の要點

・古い時代から河南の東部や北部に定住していた殷人は、早くから

東夷・東南夷と相接していたものかと思われる。

・殷の西方の前衛は平陸附近の戎までであって、それから西方には一時的に支配が及ぶことはあっても、殷族が自ら陝西の地に入ることはいになかったのではないかと考える。殷が西方の文化に接しうるのは、主として河北西部と山西南邊との二方面であったが、いづれも多くは戦闘を通じて接するという對抗的な關係においてである。

・南方との關係は、西方にもまして重要であった。南方という意味を、ここでは江蘇・安徽・河南南部の二帶を汎稱するものとしておく。江蘇・安徽には東南夷がいたが、これは東夷と同種族の沿海民族であったと思う。河南南部から長江の一帯にも他の一系があつて、これは卜辭では南、『論語』や『楚辭』に南人・南夷と呼ばれているものである。

「釋南」の構成

- 一 南の初義に關する諸家の説と問題點
- 二 人身犠牲としての南
- 三 南の本義
- 四 木に懸けた樂器はいかなるものか？
- 五 銅鼓について
- 六 銅鼓の起源地
- 七 「南」字は銅鼓を吊るした形

一 南の初義に関する諸家の説と問題點

例のごとく『説文解字』の引用から始まる。「南、艸木至南方有枝任也。从宋羊聲。」（南、艸木南方に至りて枝に任せる有るなり。宋羊の聲に从ふ。）とある。枝が鬱蒼と生い茂る状態をいうものであるが、東南西北を季節の巡行に見立てて「南」を「夏」に位置づけ「夏」と同義のように扱っているのが特徴的である。當時流行した陰陽五行の思想に基づいて解釋しようとしたものであろうが、そのような觀念的な解釋を施さねば解釋できないということであろう。許慎の字源解釋にこの種のものが多いのは、やはり甲骨金文を見ることができなかった時代の人の限界である。「南」字についても、一旦『説文解字』を離れ甲骨金文の字形に即して考えなければならぬという次第になるのである。そのような立場から「南」字を解いた代表的な先學として、郭沫若・唐蘭・加藤常賢などが挙げられる。

〔加藤常賢説〕

加藤博士は、南の字形は幃帳にして丹は亦聲であるというが、問題は次の三點に歸する。

- ① 又は幃帳の形であるか？
- ② 下の丹形の字は丹字であるか？
- ③ かつ亦聲であるか？

（注）形聲字のうち、聲符にその原義を含むものを（亦聲）と言う。

①の解釋の仕方はかなり複雑な手續きを踏む。先ず、説文解字の解に「出其飾也」（出は其の飾りなり）としているのを採って、これを南字の上部ノと同字で幃帳の象と見なす。ついで丹を亦聲として南方溫暖の意を表わしたものとすることによって、「帷幕囚ノ溫暖ノ意」とする解釋を導くのである。中央に柱をもつ帷幕といえ、もはや幃蓋や几帳の類ではなく、すでに住居形式の問題となる。しかも帷幕は朔北に最も廣く行なわれたものであるから、殷人が南方の意を寄せた文字としては、あまりふさわしくない。

②③については、丹・青の字は卜辭に見えず、金文にはじめて見える文字である點ですでに無理があるが、字形から考えても南字の下部は井中に丹の象があることを示したものとはいえない。さらにこれら上下の字形を合わせて會意とし亦聲とする解釋は、容易に成立しがた

〔唐蘭説〕

王國維が穀と釋したのを排して、孫詒讓の埶の説を是としている。土を穀となし穀となして、「形聲俱に變ず」というような大膽な議論にしてしまったのは非常に惜しまれる論だという。

〔郭沫若説〕

初め罇鐘説を立てていたが、その後自説を變えてしまった。唐蘭氏の説を見て自説を棄て、新たに穀字説を出した。唐氏の字解を受け、土を青字とする。ただ穀としたのでは用牲の例に通じがたいので、こ

れを穀すなわち小豕と解する。しかし卜辭には「十豕出吉」のように豕と吉とを並稱するものがあつて落ち著かない。その唐蘭説の方は穀は動物の乳子を泛稱する語であるという。しかし「南」が南方の意味にも用いられることについては觸れない。

以上が當時の字説の主なものだが、それまでの字説を整理することによって、問題点を析出するわけである。これらの字説が十分でないのは、方位を示す「南」字が犠牲にも用いられるという點を説明できない片手落ちの説になつてゐる點にある。白川博士はこの兩方の意味を充たすにはいかに考えるべきかという方向に進んでいく。そこで先ず人身犠牲としての「南」とは何か？ ということから入るのである。

二 人身犠牲としての南

甲骨文の中に人身犠牲のことがかなり多數出てくるのだが、中國の文字學者たちは、甲骨文の中に人身犠牲を見ようとはしない。しかし殷代から五〇〇年以上も下る春秋時代ですら人身犠牲が行なわれていたことが『春秋左氏傳』の記事から分かるわけで、その紹介から始められるのである。なお、注意しておきたいのは、ここに見える「用いる」という語は、漠然とした「使用」の意味ではなく、「犠牲として用いる」の意味だという點である。これは甲骨文以來の用法である。

一、宋公は邾の文公に鄆子を執えしめてこれを次睢之社に〔犠牲として〕用いた。(僖公一九年)

(注) この次睢之社というのは臨沂の東界にあつて、食人社といわれ ていたものだということである。

二、楚子が蔡を滅ぼすや、蔡の世子を執えて歸り、これを〔犠牲として〕用いた。(昭公一二年)

(注) 公羊傳によると、これを築防に〔犠牲として〕用いたとあるから いわゆる人柱にしたものであらう。

三、平子が莒を伐つて俘を取り、これを亳社に〔犠牲として〕用いた。(昭公一〇年)

四、魯は河南北部の長狄と戦つて長狄喬如を獲て、その首を魯の郭門である子駒の北門に埋めた。さらに齊の襄公もまた長狄を破つて長狄榮如を獲て、その首を齊の邑・周首の北門に埋めた。

(文公一一年)

卜辭には牲獸とともに犠牲に供せられているものに羌と南とがある。先ず羌の例を列擧する。出を動詞として用いる場合、犠牲に用いるの意を示す。

○辛巳卜行貞、王賓小辛、𠄎伐羌二、卯二年、亡尤。[H23106]

(辛巳卜して行貞ふ、王小辛を賓するに、勻して羌二を伐ち二年を卯して、尤^よ亡^なきか。)

○甲午卜行貞、王賓□□、勻伐羌三(一)、卯平、亡尤。[H23569]

(甲午卜して行貞ふ、王□□を賓するに、勻して羌三を伐ち、平を卯して尤^よ亡^なきか。)

○癸卯卜殷貞、出于河三羌、卯三牛、燎三牛。[H1027正]

(癸卯卜して殷貞ふ、河に出するに三羌をもちひ、三牛を卯し、三牛を燎せんか。)

○癸卯卜殷貞、燎河一牛、出三羌、卯三牛。[H1027正]

(癸卯卜して殷貞ふ。河に燎するに一牛をもちひ、三羌を出して、三牛を卯せんか。)

○丙寅卜、又伐于司、忆卅羌卯卅家。

(丙寅卜す、又司を伐ち、卅羌を忆し卅家を卯せんか。)[H32050]

○丙午卜貞、畢奠歲羌卅卯三羊、簋一牛、于宗用。六月。[H320]

(丙午卜して貞ふ、畢奠歲するに羌卅をもちひ三羊を卯せんか、一牛を簋するに、宗において用ひんか。六月。)

○甲寅卜、其帝方一羌一牛九犬。[H32112]

(甲寅卜す。其れ帝方するに一羌一牛九犬をもちいんか?)

これらの辭例において羌は牛羊犬豕とともに犠牲に用いられている。郭沫若氏はこの羌を羌人と解することができないと見えて、羅振玉氏の「羊」という説を退けて「狗」と解したりするのだが、そうすると「貞、方帝一羌二犬卯一牛」[H418]のように羌と犬とを一緒に用いる例があつて成立しない。また別に、

○丙卜、翌甲寅彫、畢御于大甲、羌百羌卯十牢。[粹・190]

(丙卜す、翌甲寅彫す、畢大甲を御するに、羌百羌をもちひ十牢を卯せんか。)

○丁酉、宜于禋、羌二人卯十牛。(丁酉、禋に宜するに、羌二人をもち

ひ十牛を卯せんか。)[粹・411]

という例もある。だがこの場合「羌百羌」「羌二人」と記されているのを「狗百狗」「狗二人」としなければならなくなっておかしな読み方になる。そこで郭氏はまた「磔」という新しい解釋を立てるのだが、今度は、一旦否定したはずの人牲を認めたことになってしまふ。

白川博士はさらに羌人を捕獲する「王往伐羌」(王往きて羌を伐たんか。)[H6617甲]や「王由次令五族伐羌方」(王由に次して五族に令して羌方を伐たしめんか。)[H28053]など、多数の有力な部族が羌人捕獲に動員される例を挙げている。また羌のあるものは殷室に使役されることもあるのだが、多羌や多馬羌・羌芻などの例を挙げて、彼らが殷の宮廟において卜骨の修祓にも關與していたことにまで言及する周到さである。ここまで周到に詰められると羌が人間以外を意味しないことは明白である。殷の大墓から多数發見される人牲がそれを示していると思つていいだろう。こうして異族を用いた人牲の可能性があることが明らかになれば、南が他の牲獸とともに宗廟に用いられることは何ら不思議ではない。そこで南人を犠牲とする用例の列擧となるのである。

○甲申卜貞、翌乙酉出于祖乙牢出二牛、出南。

(甲申卜して貞ふ、翌乙酉祖乙に出するに牢をもちひ、一牛を出して南を出せんか。)[H25]

○出于祖辛八南。九南于祖辛。(祖辛に八南を出せんか。九南を祖辛に

もちひんか。)[H1685]

四三

○癸未卜。帚出妣己南犬。(癸未卜す。婦は妣己に出するに南・犬をもぢんか。) [H40852]

○貞〔癸〕年于王亥、尙犬一・羊一・豕一・燎三小羊、卯九牛・三南・三羌。 [H378]

(貞ふ年を王亥に崇るに、犬一・羊一・豕一を尙し、三小羊を燎し、九牛・三南・三羌を卯さんか。)

○庚戌卜牽貞、箠于西一大・一南、箠四豕・四羊・南二、卯十牛・南一。 [H40514]

(庚戌卜して牽貞ふ、西に箠するに一大・一南をもちひ、四豕・四羊・南二を箠して、十牛・南一を卯さんか。)

○丁巳卜賓貞、燎于王亥十南、卯十牛・三南。 [H6527]

(丁巳卜して賓貞ふ、王亥に燎するに十南をもちひ、十牛・三南を卯さんか。)

○貞、方帝卯一牛出南。(貞ふ、方帝するに一牛を卯し、南を出せんか。)

[H14300]

○貞、皋以二南于父…大乙。(貞ふ、皋は二南を以てて父…大乙に于かんか。) [H32430]

○丁…翌…大…五十…伐…南。 [H963]

○出于祖辛伐南。(祖辛に出して南を伐たんか。) [H655 正甲]

これらの「南」が南人と稱ばれる南方の異族であることは、もはや疑いを容れない。こうした異族の人身犠牲には羌・南の他に白人などの異常者や不自由人なども用いた例を挙げられるが、ここでは割愛

する。さて南字の本義は何であろう？ 次に南方・南人の義はどのようにして生まれたかを考えてみなくてはならない。次はこの問題である。

三 南の本義

郭沫若氏は最初、白川博士の提示する初義に比較的近い説を立てていた。尙(南)を「鈴」と解するものである。しかし南を含む文字には別に「𠂔」のような字形がある。これはいわゆる占卜の際の貞人の名前で、敲と釋することが出来るものだが、尙をバチ状のもので叩く形に描かれている。郭沫若のいう鈴では「𠂔」を加えて撃つということは理解できないとされる。なるほどその通りである。そして郭沫若自身もその点が弱いと見ていたのか、後にこの説を棄てて唐蘭説に従うことになる。この件は後に改めて言及されるのでこうした経過のみを記して先に進むことにする。

郭沫若氏の説は白川博士が提示しようとする説に比較的近いところであったが、それは楽器説を採るという意味で近かったという意味であって、鈴では辻褃が合わないのである。ではどのような楽器であるか、そこに入っていく。甲骨文の「南」字形を考える場合、前述の「𠂔」字形からして楽器であることが分かるが、さらにこれを別の字形と照合しながら考察を進めていくことになる。先ず、「𠂔」のような字形がある。これは石磬と呼ばれる楽器を撃っている形である。まさに「磬」字の上部の象形であるが、この磬は祭祀の時に用いられる石製の楽器で、後に編磬と編鐘とが組み合わされかなり大規模な古代オー

ケストラの編成へと進展するものである。その石磬が殷代にすでに見えている。その上部は「𠂔」字形になっている。また太鼓を示す𠂔の場合も同様で、𠂔・𠂔のようにやはりこれを撃つ形が「鼓」の字である。このような楽器を繋げる木の形であることは一目瞭然である。この字形は「釋史」に關連的に出てきた「告(𠂔)」にも見えている。この「𠂔」について私の推定を交えるならば、おそらく祭祀の際に用いられる聖なる枝ではなかったかと思われる。博士はここで豈・𠂔の二字に關係する文字で『說文解字』の豈部・鼓部・豆部・喜部に収録されているものを列挙して、分類の仕方自體に混亂があることにも言及される。それは後で、食器と樂器とを許慎が混同していることを示すための伏線である。

ついで、『說文解字』の混亂を一層複雑化した説を立てている加藤常賢氏の説にも言及される。加藤氏の字源論が複雑になるのは、象形字であるはずの字形をばらばらに分解してそれぞれ別々に解釋し、それを後で合成してその合字であると解くからである。甲骨文は象形文字ではないとも考えているのであろうか。加藤氏はそのような手法で「豈」と「𠂔」とが同じであると説くのであるが、音が「豈(キ)も𠂔(チュウ)と一同一であると思う。ソレハ(チュウ)の轉音である」とするなど解釋に強引なところがある。かくて博士は「豈」字と「豈」字の違いについて『說文解字』の誤りを正しながら次のように結論する。

食器の豆に屬するものは豆・𠂔の系列に、樂器の豈・鼓に屬す

るものはまたその系列に、截然として區分されなくてはならぬ。豈と豈との別は、豆とその豆實に象るものと、鼓とその鼓を繋げた形に象るものとの區別である。……說文は豈に加うべき解字を誤って𠂔にも加えて混亂を生じたが、加藤博士は兩字を合せて一にし、そのキとチュウとの聲を混じて一とされ、一層理解しがたいものとなった感がある。(七八頁)「二二九〜二三〇頁」

ここまでで「南(𠂔)」の上部「𠂔」字形が樂器を繋げるための又枝であることが述べられてきた。ここに擧げられた樂器がどのような時に用いられるものなのか、私の説明ではすでに述べてしまっているが、博士はここで改めてその問題に入られる。ここで用いられるのは卜辭に見られる「來媼」の例である。「媼」字は𠂔・𠂔のように書く。

「鼓」と「女」に従う字である。「來媼」の意味は「漁陽の鼗鼓地を動かして來たる」の謂いで、外賊の侵寇を意味する語である。女字形に従うのは古代シャーマンの習俗にもとづくものである。わが國の古代にも、軍事に女人を先頭させる例があったことが『古事記』上卷の天孫降臨の條に見えている。こうして木に繋げた樂器を特定する方向へと進む。

四 木に懸けた樂器はいかなるものか？

郭沫若は最初罇鐘の類をもつて解しようとした。罇と鐘とは同類の樂器であるが、殷代にそれらがあったとするには疑問が残る。鐘より古い樂器には鉦(罇)がある。その形は下に柄があって、口は上に向かっ

て開いている。ちょうど鐘を逆にした形である。したがってこれは木に差し込んで立てた形で撃つ構造になっている。おそらく楽器というよりも軍事の際に撃つたものである。殷代に見られる鉦（鎛）は構造からして字形に合わない。これを殷代のものに求めるのは難しいということになる。しかし考古學方面から見ると、この殷代の鉦が南方に傳播し發展した後に、それが逆に傳播し流入してくるといふ説を、林巳奈夫氏がかなり後になってから發表された。¹ その逆流入の時期は西周時代中期頃ということであるから、その間南方では獨自に發展を遂げたことになる。しかしこの林説は「釋南」立論の時期にはまだ見られず、白川博士が獨自に考察を進めなければならなかった。博士は「南」字を鐘を繋げた形としえない理由を次のように整理される。

- 一、遺品の時代が少し遅きに失すること。
- 二、上の甬の部分が南字の字形には見られないこと。
- 三、鐘の鉦の部分は概ね「」形であるから、その形ならば「」と書くべきであるのに「」のように横形にしたものがあること。
- 四、下部の兩銑と于との部分「日」、南の字形の「日」の下部が虚しいものと著しく異なること。
- 五、鐘を繋げた形を何故に南と稱するかを説き得ないこと。

特に第五點が重要な鍵を握っているのである。であるとすれば、この行論の行方は左に記された方向に向かうことになる。

もし楽器の名にしてしかもそれが南方の意を示しうるものがあるとすれば、それはその楽器が南方特有のものであり、楽器自體が南方を表現しうるようなものでなくてはならない。しかしこのようなものとして、特にわれわれの注意を喚起する楽器は、銅鼓のほかにない。私は甚だ武斷であるかも知れないが、南支から佛印・東印度諸島にわたって廣汎な分布を示す銅鼓を以て、これに充ててみたいと思う。そこで以下に少しく銅鼓について述べよう。(八〇頁)「二三二頁」

五 銅鼓について

最初に銅鼓が學界の注目を浴びるようになったのは、一八六〇年に銅鼓が発見されたことがきっかけであると記されるが、これは歐米の學界のことであって、日本ではそれより早く一八六二年に松崎益城が「銅鼓考」を發表して、中國の西南蠻夷の作ったものであるという卓論を示していた。その後、大給恆「古銅鼓考」(一八八五年)、鳥居龍藏「苗族調査報告」第九章(一九〇二年)が續き、また更に原田淑人「銅鼓の製作時代」、松本信廣「印度支那の民族と文化」(一九四二年)、禰津正志『印度支那の原始文明』第一四章(一九四三年)と續いて、銅鼓研究としてはすでにかなりの蓄積が見られる。一方中國では凌純聲「記本校二銅鼓兼論銅鼓の起源及其分布」(一九五〇年)が發表された。歐米の學界ではその後ようやく楽器であることが知られるようになり、マイヤー(一八八四年)、フォイ(一八九八年)、ヒルト(一八九〇〜一八九六年)、ホロート(二八九八年)、ヘーゲル(一九〇二年)

等の學者によって研究が進められた。特にヘーゲルの研究は銅鼓の様式区分を試みた大著で、「南」字が銅鼓を示すものだという博士の説に有益な情報をもたらしている。以下展開される銅鼓の概説は大部分が松本・禰津・凌の論著に據るとのことである。以下、博士は「中國文獻中の銅鼓」「ホロートの見解の概略」「中國國內の分布」「銅鼓の様式とその分布」の順に概説されるが、ここでは要點を整理する形で進めることにする。

(1) 中國文獻中の銅鼓

中國の文獻で銅鼓のことが見えるものは「後漢書」馬援傳に「交阯において駱越の銅鼓を得たり」とあるのが初見である。その後の文獻三〇件ほどをその後列挙している。そしてそれらの記事を検討した結果、「銅鼓が獠族の用いた特有の樂器であり、かつ極めて貴重とせられていたものであることが知られる。」(八二頁)としている。銅鼓が實際に用いられる時の様子を記した「婁淵廣州記」(後漢書注引)を引用しておく。

俚獠鑄銅爲鼓、鼓唯高大爲貴、面闊丈餘。初成、懸于庭、剋晨置酒、招置同類、來者盈門、豪富子女以金銀爲大釵、執以扣鼓。叩竟留遺主人也。

(俚獠 銅を鑄て鼓を爲る。鼓は唯高大なるを貴しと爲す。面闊く丈余なり。初めて成るに、庭に懸く。晨に剋して置酒し、同類を招置す。來る者門に盈つ。豪富の子女金銀を以て大釵を爲り、執りて以て鼓を扣く。

叩き竟りて主人を留遺するなり。)

(2) ホロートの見解の概略

銅鼓が獠族に起原するものであることを、オランダの東洋學者ホロートも「東印度諸島及び東京・アジア大陸の古銅鼓考」で述べている。白川博士のまとめた文章をここに引用しておく。

銅鼓は紀元一世紀頃、廣東の南西隅に流布し、四世紀上半に揚子江沿岸南部に行われた。廣州の民は銅の大部分を鑄鼓に投じ、金銀をもその溶爐に投じたので、時の政府は鑄鼓を禁制したことがある。銅鼓は廣く南方の獠族の間に行われ、でき上ったときは盛大な饗宴を行なった。また戰時にはこれを鳴らして衆を徵集し、病の時も平癒の祈願に用いた。南方の夷蠻はしばしばこれを政府に進獻したが、南夷にあっては、その所有者はこれによってその威權・勢力・門地を象徴しうるものとされ、これを失うことは従つて蠻運を失うものとされた。かくてホロートは、その分佈・文様・使用目的にも考察を及ぼして、銅鼓は獠人に起原するものであることを述べ、從來のヒルトの馬援制作説を破っている。細部にわたる議論はしばらくにおいて、銅鼓が獠族に起原するというこのホロートの見解は、今日においてもなお學界の支持を得ているものである。(八三頁)「二三五頁」

銅鼓が獠族に起原をもつ祭器であることがほぼ共通認識となつたと考えてよさそうである。

(3) 中國國內の分布

銅鼓の分布は、南支・佛印・東印度諸島から大洋州の島嶼に及ぶ廣汎なものである。それで銅鼓の起源地にも諸説が生じている。今度はこの起源地を絞り込む方向へと進む。銅鼓の分布と銅鼓の様式の種類との相關關係を考えてみるという方向である。ここで博士の採られた凌純聲「銅鼓的地理分佈」の整理を引用する。

〔中國〕

四川 (明史劉顯傳) 宣賓 慶符 長寧 筠連 高・珙 古宋

屏山 雷波 西昌 廬山 奉節

湖南 麻陽 嶽陽 乾城

江西 南康 銅鼓

廣東 (ヘーゲル) 一六五 番禺 茂名 信宜 海康 合浦

靈山 欽 萬寧 文昌

廣西 平南 桂平 鬱林 博白 北流 岑溪 蒼梧 桂林

融 象 橫 邑寧 凌雲

崇善 憑祥 Ailan

貴州 貴陽 黎平 印江 思南 銅仁 遵我 安順

雲南 Parmentier 昆明 瀘西 騰衝 芒市

〔中國外〕

東京 (河内・河南・寧平・河東・和平)

安南 (清花・公通・島明・巴色・沙凡那克・景廣・三諾)

中原から見て南方に廣く分布し、それがベトナムにまで及んでいることが分る。

(4) 銅鼓の様式とその分布

次に銅鼓の様式を分布状況と關係づけて考える。これは最も古い様式がどこであるかを探るためである。分類の仕方はヘーゲルによる。

第一式……最も古く大型の基本形式をもつもので、胴部が三區に別れ、上部は膨らみ、中央部は垂直、下部は截頭圓錐形をなす。上部に鼓面と胴部とを結合する丸く張り出した部分がある。中央部の下は圓錐胴となっていて、縁は外方に開いている。鼓面と胴部張出しの裝飾文は人物・動物・家屋・舟・飛鳥の原始的繪畫・幾何文様等である。鼓面には蛙・騎馬像等が附けられている。

上部が鼓面に接觸する部分に張出しがあるかないか、その他若干の點の相違によって、更に甲類と乙類とに分れる。

第二式……胴の上部と中央部間の凹んだ稜がなく、胴の上部は下部の圓錐胴に直接終るS字型の側面を示す。鼓面は突出し、文様區は第一式より多く、微細な意匠の裝飾文から成る。全體の文様は籠目の青銅器の傳統を示している。把手は小さく優美となり、重要性を失なうて、ときには多くの小枝のある編物形の三角片から成る。

第三式……形小さく、蛙の數が多く、圓筒部は大きく下部は小さい。

鼓面の文様帯も少なくなつてジグザグ文が形式化し、動物の文様は浮彫となる。いまカレン族の間に傳わつて
いる。

第四式……中國の意匠多く、丈低くして非實用的である。鼓面の蛙はなく、中央の星から十二本の射線が放出され、十二支
獸を鑄出す。南支那に最も多く發見され、ラオスのシャ
ン族、ビルマの白カレン・紅カレン族の間でも使用され、
タイの寺院や宮殿においても用いられている。
この四式はそのまま時代の新古を意味するものと考えられる。

〔様式の分布〕

- ・ 湖南・四川……第一式甲類
- ・ 廣東・廣西……第一式乙類と第二式
- ・ 貴州・雲南……第三式
- ・ 分布が廣汎……第四式

〔新古の層〕

- ・ 第一層（第一式甲類）……湘西・川南・滇南から半島區の東京^{トシキン}・ラオスに及ぶ。
- ・ 第二層（第一式乙類）……廣東・廣西から東京^{トシキン}・ラオス・安南・カンボジアを経て東印度諸島に及ぶ。
- ・ 第三層（第二式）……廣東・廣西から東京・ラオスに達する。
- ・ 第四層（第三式）……貴州・雲南からビルマ・シャムに分布。

・ 第五層（第四式）……中國と東京灣^{トシキン}付近一帶に分布。

各様式の分布状態は銅鼓の發源地とその波及の仕方を反映するものと思われる。

六 銅鼓の起源地

銅鼓の分類とその分布によつて、銅鼓の最も古い第一式甲類が湖南・四川であることが分かつた。これをほぼ銅鼓の起源地と考えれば良さそうだが、博士はなお慎重に検討する手続きを踏んでいく。紹介された諸説を列挙しておこう。

インド説（シユメルツ）

カンボジア説（マイヤー・フォイ）

中國南部・インドシナ半島北部説（ホロート、ヘーゲル、ラクーベリ）

東京南部^{トシキン}・安南北部説（ゴルーベフ）

西歐・中亞・西南諸省・インドシナ半島北部傳來説（ケルデルン）

淮河・長沙説（カールグレン）

以上は凌純聲の整理したものが、凌氏はカールグレンの説がほぼ當たつてゐるとして、長江中流、雲夢大澤の地が銅鼓の起源地であるとする。その理由は次の四點である。

- 1 湖南省麻陽は宋・明のときに甚だ多數の銅鼓を出土した。黎獠民族は古くこの澤畔にあり、その後次第に南下したものと

思われる。

2 唐の文人孫光憲・杜牧・溫庭筠・許渾の詩に獠族が銅鼓蠻歌、

神を祀って樂舞することが歌われている。

3 銅鼓の文様にある房室と船との形式が「依樹積木、以居其上」といわれる獠族の生活と一致している。

4 黎獠民族が北方中原諸族の壓迫を受けて南下した事情が古い資料によって證明される。

ここに黎獠とされる民族は文獻に俚獠・狸獠なども記される民族で、凌純聲氏によれば今のインドネシア人と同一の民族であるという。これはコルベフやハイネ・ゲルテルンなどの考え方にも通ずるものがある。そして銅鼓の最も古い形式のものが湘西の洞庭湖畔附近から發見されることに注目すべきだという。ここで少しだけ付言しておくこと、「俚獠・狸獠」などとされる民族は現在壯族・布依族と呼ばれるものであるらしいことが馬寅主編『概説中國の少數民族』に記されている。そして銅鼓の使用はさらに苗族にも擴がっていることをも考慮しておくべきだろう。

七 「南」字は銅鼓を吊るした形

博士の考證は次に「南」字が銅鼓を吊るした形であることに入っていく。字形認識に關わる問題であるから、銅鼓を實際に用いている場面や様子を確かめなければならない。それで銅鼓使用の様子を記した文獻を引用しながら論證の補強が圖られる。ただ讀む側からするとす

でに述べられたこともあり、内容的に重複する氣がするので省略に從うが、しかしこうした手續を疎かにしない點にこそ博士の論證が周到極まりないことを示してもいるわけである。ここでは「南」字が銅鼓を吊るした形であることを緻密に述べている箇所を引用しておく。

これらの記述によるときは、銅鼓はこれを懸繫して撃つたことが明らかであり、その他の記事においても、その聲の極めて清亮であることをいうものが多いので、別に懸繫することをいわないものでも、みなこれを繫けて撃つたものであることが知られる。いま東京河内の東洋學院博物館に藏する一銅鼓は、吊り下げた形のままで寫されているが、實は繫けるといってもこのように尊形に下げたものではなく、上の方はもつと絞って中央の一處に合せて吊るしたものであろう。銅鼓の文様には、銅鼓を木架の下に描いたものがあるが、おそらく一層古い時代においては、磬が磬架のように直接木に繫けられていたように、銅鼓も直接木に繫けたものではなからうか。従つてその形は木形の丫と、銅鼓の側面形片と、そして銅鼓の兩旁の耳から丫に繫けられた紐の部分へと、この三つの部分をもつことになる。そしてこの三つの部分を合せるとまさに尙とはなつて、銅鼓を木に繫けた全形をあらわす。銅鼓の下部は空洞となつていて、その點が鐘と全く異なつており、鐘ならば下邊の手の部分が尙のような形にはならないはずである。もし右の推定が成り立つものとすれば、南字は銅鼓の兩耳を吊つて、これを木の一處に繫けた形であり、本來は樂器である銅

鼓の名である。しかもこの形式の楽器はひとり狸獠に限られた彼ら特有のものであり、また彼らはこれ以外には他の楽器を用いることが甚だしい。そしてこのような事情からいえば、楽器の名である南がやがて南人たる狸獠を稱する南となり、ついに南方を意味する南に用いられるに至った事情が、極めて自然に解せられるのである。(八八頁)「二四〇〜二四二頁」

こうして「南」字が銅鼓を吊るした形であることが緻密に論證された。もはや疑う餘地はないと言ってもよい。しかしこれは字形を中心に考察した結論である。次に「南」の音のことに入る。「南」字は「ナン」という音をもつが、銅鼓を意味する語の音が「ナン」であることを示すことができるかどうかという問題である。この点については比較的初めの方で言及されていたのでご記憶の読者もあるだろう。ここで再度持ち出してその裏付けを提示するという運び方である。

ここも博士の文章を引用しておこう。今し方引用した箇所直ぐ後のところである。

銅鼓を木に懸繫した形である「南」が、ナンの音をもってよまれたのは、おそらく獠人の語に出るものであろう。鳥居龍藏博士の苗族調査報告によると、博士が貴州北盤江の上游にある毛口地方で仲家の銅鼓使用状況を調査されたとき、彼らは、われわれは苗子や羅々と違って、もとからここにいたのではない。明の洪武

のとき、はじめてここに遷ってきたものだ。われわれの楽器には笙の類はなく、ただ銅鼓だけを使う。銅鼓は土語では Nan-Yan という。ときどき地中から發掘される。漢族が侵入してからはすっかり奪い取られ、今ではもうなくなってしまった。だからやむなく皮で作った太鼓を使っている、と語ったという。(八八〜八九頁)「二四二頁」

こうして音の面からも「南」が銅鼓を示すものであることが明らかになった。博士の考證はさらに念入りに細部の検討を重ねていくが省略に従う。

○「小要約」

以上によっていえば、南字は銅鼓を木に懸繫した形であって、それは Nan-Yan とよまれ、その樂とあわせて南任の語があつたようである。いま銅鼓を土俗の語で Nan-Yan と呼ぶのは、その語の今に存したものではないか。もしかか考えうるならば、南字の形音義は、一應の説明をなしうるに至るわけである。

南は獠族特有の樂器であり、古い時代からこの民族独自のものとして漢人に強烈な印象を與えていたものであつたから、漢人はやがてかれらをも南とよび、南人と稱し、延いてはかれらの住む地域が南とよばれ、また轉じて方角の名にも用いられるに至つたという事情は、右によつて大體首肯されるであらう。

これらの南人は、古くは遙か北方の揚子江中流附近一帯にあり、桐

柏山脈を越えて中原の殷人と接觸をもつていたものと思われる。古代においては、異種族の間には互いに他族を犠牲としてこれを祀る風があつて、殷人が羌・南・夷をその宗廟・陵墓に用いたことはすでに記した通りである。ただ南に關する卜辭が羌に比較すると甚だ少なく、特に獲南の辭が殆ど見いだしがたいほどであるのは、南人が殷と接觸しつつも、かれらが主として山谷や沼澤地の狭長な地帯などを選んで住み、かつ甚だ敏捷であり、危急に臨んでは直ちに南を鼓してその同類を結束し、強力な抵抗を行なつたため、羌人のように容易に捕獲しえなかつたというような事情もあつたものと思う。

おわりに

博士の論證は「南」字の字源論の形式を採りながら、銅鼓を用いた祭禮文化の廣がりを描き出した。これを銅鼓文化圏と呼んでもいいだろう。實際、現在苗族や壯族の居住する都市には巨大な銅鼓のレブリカが町のシンボルとして聳え立っているところがあつて大勢の觀光客の目を樂しませている。

付記

「釋文」「釋史」「作册考」「釋師」「釋南」と讀みすすめてきた「白川文字學の原點に還る」は今回で一旦終了する。最も重要だと思われる論考をひとまず終えたことになる。この五篇を讀んでおかないと白川文字學の眞髓を理解したことにはならない。まだ多くの論考が残っているが、後は讀者自身が獨力で讀むべきだろう。

注

- (1) 林巳奈夫「殷 西周時代の地方型青銅器」(考古學メモワール 一九八〇)(學生社 一九八〇年)
 - (2) 馬寅主編・君島久子監譯『概説 中國の少數民族』(三省堂 一九八七年)
- (立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員)